



#11

幼なじみフレンチメン
パン

著・監澤たすく
イラスト・かもめ遊羽



「なー、そろそろ休もうぜー」

「ダメよ、たっくん！ 5分前に休憩したばっかりでしょー！」

俺の前で両手を制服姿の腰に当てたまま、頬を膨らませているのは幼なじみの由美。
黒縁メガネに三つ編みのおさげ、といういかにも優等生サマな出で立ちだ。

まあ、実際学年首位の優等生サマなだけどさ……。

「たっくんの勉強、おばさんとおじさんが留守の間はしっかり見るよう言われてるんだから！
ほら、さっさと問2！」

由美が数学の問題集をこれでもかという勢いで突きつけてくる。

せっかく冷房の効いた俺の部屋もこれじゃ暑苦しいことこの上ない。

テレビもゲームもPCも勉強の邪魔だと全部由美にコンセント抜かれたし……。

だいたい俺、数学は苦手なんだよなあ。

「苦手だから頑張つて勉強するんでしょ!? まずどこが判らないか判らないとあたしも教えてあげられないでしょ!? そうでしょ!?」

「うぜえ……」

「何か言った!?」

「いーえー、何も言つてませーん！オレ数学チョーダイスキー！」

由美の目が三角になってきたので、俺はしぶしぶ問題集に戻る。

あーあ、せっかく親父とお袋が海外行つてる間は羽伸ばせると思ったのに……。大誤算だったな。

ちなみになぜ俺を置いて旅行してるのかというとお袋曰く「15回目の新婚旅行だから〜」だそうだ。もうアレ過ぎて突っ込む気も起さない。

しかし由美の奴も親父とお袋の頼みだからってわざわざ自分の休み潰してまでウチに来ることないよな。何かにつけ俺の世話を焼こうとするんだから……。お前は俺のお袋かって言うんだよ。

「なあ、由美」

「なになに、どこが判らないの?」

「いや、ちがくてさ。なんでお前そんなに一生懸命俺に勉強させようとするの?」

「なんでつて……。それはおばさんとおじさんにそう言われたから……」

「それだけ?」

「! それ……」

急にもじもじと挙動不審になる由美。

人差し指の白い指先がせわしくなくフローリングの上に「の」の字を描く。

なんだ? 一体何がしたいんだお前?

「だつて、たっくん、S高狙つてるんでしょ?」

「うん、まあ一応な」

「でも偏差値全然足りてないでしょ」

「……まあ一応な」

「だから頑張らないと、あたしと一緒にS高行けなくな……」

「ん？」

「な、なんでもない！ と、とにかく頑張ってS高行っておばさんたち安心させてあげなきゃ親不孝だよ！ そうでしょ！」

「へーい……」

何故か真つ赤になった由美にばんっ！ とローテーブルを叩かれて俺は洪々と問題集に戻った。

「あつ」

「なんだよ？」

「たつくん、えり曲がつてる！」

「いいよ、どうせお前と俺しかないんだし」

「良くないの！ そういうだらしないところがだめだって言ってるの！ あ、ちょっとこっち寝癖ついたままじゃない！ もー、ほんとにだらしないんだからー」

「だから別にいいって言ってるだろー。ん？」

由美が自分の学生鞆からクシを取り出した拍子に何かがこぼれ落ちた。見るとそれは小さな10センチくらいのへちやむくれの人形だった。小人のようだが、目と鼻の位置がむちゃくちゃでまるで福笑いだ。

「なにこれ？ ストラップ？ にしても変な顔だなー」

「あ！ か、返してよ！」

「おっと！ こいつを返して欲しかったら俺様に30分休憩を許すんだな」

「たつくんずるい！ っていうか、本当にやめてよ！ それ大事な物なんだから！」

「取り返したかったらここまでおいでー」

俺はおどけながら人形を頭上にあげて、そのままドアから外へ逃げ出す。

「もおー本当に怒るわよー！」

「へへっ、悔しかったらここまでおい……」

「あつ……」

部屋から出たところにある階段につながる廊下で、へちやむくれ人形争奪戦を繰り返し広げている俺らは、バランスを崩してそのまま落下しそうになる。

「あぶな……」

俺は手を伸ばして由美を掴もうとするがタイミングが合わず、逆に由美の上に覆い被さるような体勢になってしまった。

「はあ？」

「あれ？　ここ……たっくんのおうち？」

由美はあどけない表情できよるきよると周囲を見渡している。
えーと……これは……もしかして……。

「由美さ、お前いまいくつだったっけ？」

「ゆみ、さんさい！　もうすぐよんさいだよ！」

由美はにぼつと笑うと、元氣よくそう応えた。

（……やべえ、頭打って中身が幼児に戻ってる!?）

三歳ってことは幼稚園に入ったばかりってことか……。っていうか、早く救急車呼ばないと！

「あー、すごい！　ゆみ、おねえさんになってるよ！」

携帯に手を伸ばしかけた俺の耳に由美の無邪気な声が届く。

見ると由美はリビングに置いてある姿見に自分を映してなにやら盛り上がっていた。

「すごい、すごい！　ねえ、ゆみ、おねえさんだよ！　おっぱいもあるよー！　ママみ
たーい！」

「ちよつ、おま、やめ……」

両手で自分の胸を持ち上げる由美を俺は慌てて止める。

あつぶねえ、今持ち上げすぎてちよつと制服からはみ出しそうだったじゃねえかよ、中身が！

「すごい、いつのまにおねえちゃんになったの？　ゆみ？」

「いつのまにっていうか、お前……」

「でもおねえちゃんになってよかった。だってこれもゴウちゃんにいじめられないもん」

「ゴウちゃん……?」

あー、そういうえは居たな、幼稚園の時にそんな奴が。

典型的なガキ大将タイプで、なんでも自分の思い通りにいかないと気が済まない奴だったわけ。よく他の園児を泣かしまくってたな。懐かしいな、今どうしてんだろ、あいつ。

「じゃなくて！」

思わず要らん過去を回想してしまった。

「由美。お前、ちよつと今から病院に行つて頭見てもらお、なー」

「やだー、ゆみ、びょういんきらい！」

「あ、おい、こら、待ってて！」

病院という単語に敏感に反応して由美はリビングを逃げ回り始めた。イスを倒したり皿や花瓶を割ったり、もうやりたい放題だ。……これ、帰つたらめっちゃめっちゃお袋に怒られるだろうな、俺……。

「つかまえた！」

「きゃー！」

俺は後ろから由美を羽交はがい締めにする。

由美は途中からきゃつきゃつきゃつと嬌声きょうせいをあげていた。

「どうやら途中から「逃けている」のが「追いかけてこの遊び」に由美の頭の中で変換されたようだ。」

三歳児エ……。

「きゃははは、おにいちゃんくすぐったーい！」

「え？ あ、すまん！」

いつの間にか両手が由美の胸に当たっていた。俺は慌て腕を引っ込める。

これは事故だ。幸福な……じゃなかった、不幸な事故だったのだ。忘れよう。うん、そうしよう。

忘れようと思っても両手にいつまでも残っている柔らかい感触がアレなんだが……！

「こほん。さ、おとなしく病院行こう。な、由美」

「おなかすいたー」

ああ、こいつ、次から次へともう……。

普段の優等生のあいつからは考えられない自由っぷりだな。まあ、今は中身が三歳だから

しょうがないけど。

……でも、なんかこいつが心の底から無邪気に笑ったりするのを見たのって、随分ずいぶん久しぶりの気がする。最近俺、こいつに怒られてばかりだったからなあ。

……あれ、最後に由美の笑顔見たのっていつだったっけ……？

「おなかすいたおなかすいたおなかすいたー！」

「あー、わかったわかったわかったー！」

ソファの上でばたばたと手足を動かして駄々だだをこねる由美。……ばかやろう、今パンツがちらっと見たじゃねえか！ ったく！

俺は急いで視線を逸らすと冷蔵庫の中からプリンを出してやった。確か由美の好物のはずだ。

「わー、ぶっちんだー！」

由美はきらきらと瞳めを輝かがやかせてテーブルにやってきた。

「ね、ゆみにぶっちんさせて！ ぶっちん！」

「好きにしろよ……」

言うが早い、由美はプッチンプリンのふたを開けて皿ふに伏せた。

「えーい、ぶっちん！」

ぷるん、という感じでプリンが皿ふに着地する。が早い、由美はもうぱくぱくと食べ始めた。

「あ……」
「ん、どした？」

由美が幸せそうに口に運んでいたスプーンを突然止める。

そのまま口をとがらせてしばらくプリンとにらめっこした後、意を決した表情でこう言った。
「これ、はんぶんはたっくんにのこしとく。だつてすぐくおいしいもの」

由美はとても真剣な目でそう宣言した。

まるで人生の岐路で重大な選択をするような真剣な面持ちだ。

う、いかん。

なんだかわからないけど、今ちょっと胸が熱くなったぞ。

……おい、なんでちよつとうるつと来てんだよ、俺!? おかしいぞ!?

「だ、大丈夫だよ、まだ冷蔵庫に何個もあるし、食べちゃいな」

「ほんと!? じゃあたべゆー」

俺が内心の動揺を悟られないように早口でそう言うと、由美はにぱつと天真爛漫な笑みを浮かべて残り半分のプリンに取り組み始めた。

……可愛いなあ……。

って何考えてるんだ、俺は!

「なあ」

「むにゅ?」

口をもぐもぐさせながら由美がこちらを見上げてくる。

「その……たっくんってやつのこと、由美はそんなに好きなのか?」

「うん、だいすき!」

即答だ。

しかもド真ん中ド直球。

まぶしい……由美の笑顔がまぶしすぎて直視できない……。

「ゆみ、たっくんだいすきだからずつといっしょにいるの! ゆみ、たっくんのおよめさんになるの!」

「ぶーっ!」

由美からのストレートな追撃。

コウカ ハ バツグン ダ!

俺は思わず飲みかけの麦茶を全部吹いてしまった。

「あのねえ、たつくんはねー、ゴウちゃんがゆみをいじめてるときにねー、たすけてくれたんだよ。それでねー、ゴウちゃんがひどいことしたあたしのおにんぎょうさん、ちゃんとなおしてくれたんだよ。だからだいすきなんだよー！」

「あ……」

思い出した。

さっきのへちやむくれの人形。

ゴウのやつが由美が大事にしてた人形をめちやめちやにちぎったから、残ったパーツをなんとか組み合わせて俺が縫い合わせたやつだ……！

母親に教わりながら慣れない針仕事をしただけで、両手が絆創膏だらけになったけど、由美がめちやめちや喜んでくれて、こっちもめちやめちや嬉しかったっけ。ほんとにぶっさいくな人形になっちゃったけどな……。

……十数年忘れてたのに、なんで急にこんなこと思い出したんだろう……。

「りようさいけんぼ！」

「ん？」

「ゆみねえ、たつくんのおよめさんになって、それからりようさいけんぼになるの！ ママがそれがいちばんだっけってたの！」

「そっか……うん、お前ならなれるよ。由美は頑張り屋さんだもんな」

「うん！」

つい由美の頭を撫でてしまう。由美はにぱとした笑顔で嬉しそうに頷いた。

ああ、口の周りプリンだらけじゃねえか。しょうがねえな。

由美の口を拭きながら俺は思う。

そうか。お前、俺のこと好きで……つまり心配で……だからあんなに怒ってくれたんだよな……ごめんな、気がつかなくて……。

「あのさ、由美……」

「く……」

見ると由美はテーブルに突っ伏して穏やかな寝息をたてていた。

おなかがいっぱいになったら眠くなる、か。本当にわかりやすいな、三歳児。

俺は由美を起こさないように、そっとソファに横にならせて、毛布を一枚かけてやった。

そして由美が静かな寝息を立てているのを確認してから、床に転がったままになっていたへちやむくれ人形をそっと拾いに行く。

「ほんとひでえ顔だな、お前。……でもよこれもなくて、きれいだよな、お前……きつと由美が大切にしてくれてるんだろうな、うらやましいぜこの色男……」

呟いて、俺はそっとそれを由美の鞆の中に戻しておいた。

「むにゅむにゅ……んー……あれっ!？」

「おう、起きたか、由美」

「ここ……居間？ あれ、ごめん、あたしいつの間にか寝ちゃった!？」

由美はソファから上体を起こしてあわててきよろきよると周囲を見回す。

「お、由美、お前戻ったのか!？」

「戻った……？ なにが?」

「あ……いやいやいや、なんでもないなんでもない、こつちの話」

「なによーなんか隠してるでしょ!？ あやしいわねー!」

「まあまあ。そんなことより起きたんだつたら、この間10教えてくれね？ ここだけさっき

からどうしてもわかんねーんだよ」

由美の動きが完全に止まる。

「たっくんが自分から勉強してる……!？」

「なんだよ、その天然記念物でも見るような目は」

「だってたっくんが自分から勉強してるんだよ!？ 砂漠にスコールが降るようなもんじゃな

い!？」

「失礼なこと言ってるじゃねーよ！ 俺だって勉強ぐらい自分でするわ！ あと……」

「あと?」

「ありがとな、由美」

「!」

またもや完全停止した由美。その目が驚きにまあるく見開かれていく。

「どうしたの、たっくん！ 熱でもあるの!？ たっくんがあたしに……あたしにお礼言うなん

て!？」

「あー、もうなしなし！ 今のはなし！ さっさと間10教えてくれ!」

「ねえ」

「なんだよ」

由美が上目遣いでこちらにすり寄ってくる。

「もっかい言って!」

「はあ!？」

「もっかい『ありがとう』って言って!」

「………ありがとうな」

「うん!」

由美は満足そうな笑顔を浮かべて、間10の解説を始めてくれた。

鞆の隙間すきまからこつちを見ているへちやむくれの顔も心なしか、笑顔に見えた。

おしまい